

---

# 戦場の狙撃手

瑠璃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦場の狙撃手

### 【著者名】

瑠璃

N1675M

### 【あらすじ】

「それでは試合を開始する。第十小隊は守り、第十七小隊は攻めだ。各隊員は速やかに配置に付くようになります。シヤーニッド視点で進みます。

(前書き)

シャーリング視点ですが、レイフォンがやたらと活躍します。

「それでは試合を開始する。第五小隊は守り、第十七小隊は攻めだ。各隊員は速やかに配置に付くよう」

今日は第五小隊と第十七小隊の練習試合だ。練習であつて対抗ではない為、勝ち負けが戦績に響く事は無い。もちろん、勝てば士気は上がるし負けても自分の隊の弱点などが分かるので決して無駄ではない。

「今回はこちらが攻めだ。相手のフラッグを取るか相手指揮官を倒せば我々の勝ち。そして、私が倒されるか、時間切れになれば相手の勝ちだ」

真剣な表情でそう話すのは第十七小隊のリーダーである武芸科3年の一ーナ・アントーク。

「俺はどうすればいいんだ? フラッグを狙つのか、それとも相手を狙つのか」

質問したのはこの隊の狙撃手である武芸科4年のシャーリッシュ・エリプトン。

「そうだな、今回シャーリッシュにはフラッグを狙つてもいい。レифォン、シャーリッシュからの援護は無いと思つておけ」

「分かりました」

「りょーかい」

「ピィイイイイイイイイイイイ！」

甲高い機械音が試合開始の時を告げる。

「レストレー・ショーン」

軽金鍊金鋼リチウムダイヤに剣を流す。すると鍊金鋼はその質量、形を変え狙撃銃になる。

「わてと、まずは隠れる場所探しだな

殺剣を使いながら走る。

(前方二十キルメルの所に罠を確認。迂回するよつて回避してくだれこ)

「サンキュー。フニッサちゃん」

その時少し遠くで怒号と爆音が響いた。レイフォン&一ーナと第五小隊のアタッカー、ゴルネオ&シャンテが交戦にはいったのだろう。つまりはそれだけシャーニッジが狙われる確立が減る。

「そろそろ俺も頑張るとするか

手短な樹に飛び乗る。殺剣を使い、なるべく音を立てないよつてしながら進む。

「おっ、ベンゴ。いい場所見つけたぜ

シャーニッドが見つけた場所は丁度、レイフォン達が戦う場所が見え、尚且つフラッグもギリギリ射程圏内に入る場所だった。

「二一ノナ、こちちは場所の確保終わったぜ。自分から動かなきゃ見つかる心配はないな。ただ、少しフラッグから少し遠い。俺はしばらく様子見させてもらつかんな」

（分かつた。隙があり次第フラッグを狙撃してくれ）

狙撃手は待つ事が仕事だ。焦つて撃つてもまず当たらないし、当たったとしても致命傷にはならない。それに、こちらの居場所がばれてしまう。

「ついつても、何か暇だなー」

レイフォン達とゴルネオ達の戦いはまだ続いている。レイフォンがその気になれば何処の小隊でも簡単にねじ伏せる事が出来る。しかしそれをしてはそもそも試合にすらならないのでレイフォンは普段実力をかなり抑えて戦っている。

（シャーニッド先輩）

「んーなんだレイフォン。つーかそんな事してる暇あんの？相手はツェルーのトップクラスの武芸者なのによだ。

（え、あ、はい。まあ少しば。ゴルネオは確かにツェルーでは強いですからちょっと危ないけど、じゃなくて、シャーニッド先輩

退屈じゃないですか？）

ちょっとかよ。レイフォンに内心で突っ込みをいれる。「ゴルネオと戦つている最中に日常となんら変わらない調子で喋るなんて芸当自分なら到底できない。

まつでもアイツなら出来んだろうな。

一人で強大な老生体相手に丸一日、傷ひとつ負うことなく戦うなんてことが出来るような実力なのだから。

「あん？ 退屈かつて聞かれりやまあ、少しばな。でもそがどうしたんだ？」

（いや、隊長が「シャーニッシュは今頃退屈でアクビでもじてるだろ？」「言つてたので）

そんな風に思われてんのかよ俺つて。まあ実際のところもう少しでアクビはでそうだつたが。

レイフォンの言葉が続く。

（撃つなら撃つて良いですよ。何処から撃つたか分からない様に僕がフォローしますから）

「んな事も出来んのかよ。末恐ろしい奴だな。でもまつ、退屈してた事は確かだしお前を信じて撃たせてもらひぜ」

剣を鍊金鋼<sup>タイト</sup>に送り込み引き金を引く。試合用の麻痺弾が空気を切り裂き、今までに二一ナに攻撃を加えようとしていた第五小隊の一

人の横腹に突き刺さる。突然隊員が倒れた事に驚いてゴルネオがこちらを見る。がその前にもう一人のレイフォンがシャーニッドとゴルネオの間に入り込み衝剣の雨を降らせる。

「おいおいマジかよ・・・」

驚きの声をあげる。あんな芸当が出来たということはレイフォンはとつぐにシャーニッドの位置が分かつていたという事だ。そしてあの技は・・・。

初めての第五小隊戦でも見せた技だ。後でレイフォンに聞くと『千人衝』と言つていた。

千人衝。ルッケンスの秘奥。レイフォンは100人程に増えている。これでは隊の上限人数7人は何の意味も無い。思わず指が引き金を引いてしまった。流石に2度撃てば気づかれる。そう考え移動しようとした腰を浮かした時さらにとんでもない事が起こった。

元々、シャーニッドの放つた弾丸は誰にも当たらないコースを飛んでいた。当たり前だ、そもそもねらってすらいないのである。当たらなくても飛んできた軌道でシャーニッドの位置がバレてしまうが、百数人の内のレイフォンの一人がシャーニッドの放つた弾丸を、手にした青石鍊金錠で弾き飛ばした。

「はあ？いくらなんでも無茶苦茶じゃね」

弾丸を剣で弾けば当然その弾丸が打ち消される。だがレイフォンが撃ち飛ばした弾丸はそのままの勢い、いやむしろ早くなつて別方向へと飛んでいった。

ハーレイの調整の腕はかなり良く、撃つた時の音がほとんどしない。音も無く弾も無ければ見つかることは無い。本来なら撃つ時に込める少量の剣でも相手の念威繰者に感づかれるが今はそこら中にレイフォンの巨大な剣がある。この中でシャーニッシュが少し剣を使つたところソレを察知できるのはフヨリくらいなものだろ。

そう考えた。しかしそれだけでは終わらなかつた。レイフォンが弾いた弾丸をまた別のレイフォンが弾く。

試しにシャーニッシュは適当に幾つかの弾を放つた。それら全てをどれかのレイフォンが捉え、弾く。

複数の弾丸が同時に、別方向から飛んでくるなんて想像できる訳がない。こちらの狙撃手はシャーニッシュ一人なのだから。そう思つている第五小隊の隊員に2つの弾が同時に、別方向から襲い掛かる。

せりにシャーニッシュは弾丸を放つ。そのじどうとへをレイフォンが拾い2発以上の弾を第五小隊に浴びせる。

ついに副隊長であるシャンテが3発同時に食いつて吹き飛ぶ。

レイフォンが弾き合つている弾丸の数は10数発ほど。その内の一つがフラッグに向かつて引き金を引く。それに合わせるかのように

「おつと、美味しいトコは先輩に譲るべきだぜ」

シャーニッシュが言葉と同時に放つた弾は空中でレイフォンの放つた弾に当たり小さな爆発を起こす。さらにシャーニッシュは今度は自分がフラッグに向かつて引き金を引く。それに合わせるかのようにレイフォンが全ての弾丸をゴルネオに向かつて放つ。

シャーニッドの放つた弾がフラッグを打ち抜くのと、10数発の麻痺弾に襲われたゴルネオが倒れたのは殆んど同時だった。

ビィイイイイイイイイイイイ！

試合終了の音が鳴り響く。

試合が終わつた後、シャーニッドが「最終的に全部俺の撃つた弾で倒したんだから今回は俺一人で倒したようなもんだな。」ワハハハハー、と自慢していたが十七小隊の誰もがその言葉を無視して帰つた。

(後書き)

誤字、脱字、批判があれば言つてください。  
それで、もしよければ評価や感想をください。  
僕のヤル気が上りますので　ｗｗ

つーか展開が速い氣がする。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1675m/>

---

戦場の狙撃手

2010年10月9日01時33分発行